

辨道話

道元禪師が自問自答しておっしゃったお話のところ

「いまこの坐禪の功德、高大なることをきゝをはりぬ。おろかならむ人、うたがうていはむ」

第一問答

仏法におほくの門あり、なにをもてかひとへに坐禪をすゝむるや

しめしていはいはく、これ仏法の正門（しやうもん）なるをもてなり。

第二問答

とうていはく、なんぞひとり正門とする。

しめしていはいはく、

大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、又三世の如来、ともに坐禪より得道せり。このゆえに正門なることをあひ伝へたるなり。

しかのみにあらず、西天東地（さいてんとうち）の諸祖、みな坐禪より得道せるなり。ゆゑにいま正門を人天（にんでん）にしめす。

第三問答

とうていはく、あるいは如来の妙術を正伝し、または祖師のあとをたづぬるによらむ、まことに凡慮（ぼんりよ）のおよぶにあらず。しかはあれども、読経（どきやう）・念仏はおのづから悟りの因縁（いんねん）となりぬべし。ただむなしく坐してなすところなからむ、なにによりてかさとりをうるたよりとならむ。

しめしていはいはく、

なんぢいま諸仏の三昧（さんまい）、無上の大法（だいほふ）を、むなしく坐してなすところなしとおもはむ、これを大乘を謗（ぼう）ずる人とす。まどひのいとふかき、大海（だいかい）の中にゐながら水なしといはむがごとし。すでにかたじけなく、諸仏自受用三昧（しよぶつじじゆようざんまい）に安坐せり。これ広大の功德をなすにあらずや。あはれむべし、まなこいまだひらけず、こゝろなほ酔（ゑ）いにあることを。

おほよそ諸仏の境界は不可思議なり。心識の及ぶべきにあらず。

いはむや不信劣智のしることをえむや。ただ正信（しようしん）の大機（だいき）のみ、よくいることをうるなり。不信の人は、たとひをしふとも受くべきことかたし。靈山（りやうぜん）になお退亦佳矣（たいやくけい）のたぐひあり。おほよそ心に正信（しようしん）おこらば修行し参学すべし。しかあらずば、しばらくやむべし。むかしより法のうるほいなきことをうらみよ。

又、読経・念仏等のつとめにうるところの功德を、なんぢしるやいなや。たゞしたをうごかし、こゑをあぐるを仏事功德（ぶつじくどく）とおもへる、いとはかなし。仏法に擬（ぎ）するにうたゝとほく、いよいよはるかなり。

又、経書（きやうしょ）をひらくことは、ほとけ頓漸（とんぜん）修行の儀則をおしへけるを、あきらめしり、教（けう）のごとく修行すれば、必ず証をとらしめむとなり。いたづらに思量念度（しりようねんだく）をつひやして、菩提（ぼだい）をうる功德に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千万誦（じゆ）の口業（くごふ）をしきりにして仏道にいたらむとするは、なほこれ轅（ながえ）を北にして、越（えち）に向かはんとおもはんがごとし。又、円孔（ゑんく）に方木（ほうもく）を入れんとせんと同じ。文（もん）を見ながら修（しゆ）するみちにくらき、それ医方（いほう）をみる人の合藥（かうやく）をわすれん、なにの益（やく）かあらん。口声（くしやう）をひまなくせる、春の田のかへるの、昼夜になくがごとし、ついに又益なし。いはむやふかく名利（みやうり）に惑はさるゝやから、これらのことをすてがたし。それ利貪（りこん）のこゝろはなはだふかきゆゑに。むかしすでにありき、いまのよになからむや。もともあわれむべし。

たゞまさにしるべし、七仏の妙法は、得道明心（とくだうみやうしん）の宗匠に、契心証会（かいしんしょうゑ）の学人（がくにん）あひしたがうて正伝（しょうでん）すれば、的旨（てきし）あらはれて稟持（りんぢ）せらるゝなり。文字習学（もんじしふがく）の法師（ほつし）のしりおよぶべきにあらず。しかあればすなはち、この疑迷をやめて、正師（しやうし）のをしへにより、坐禅辨道して、諸仏自受用三昧（しよぶつじじゆようざんまい）を証得すべし。

第四問答

とうていはく、いまわが朝（てう）につたはれるところの法華宗（ほつ

けしゅう）・華嚴經（けこんきょう）、ともに大乘（だいじょう）の究竟（くきょう）なり。いわむや真言宗のごときは、毘盧遮那如来（びるしゃなにょらい）したしく金剛薩埵（こんがうさった）につたへて師資（しし）みだりならず。その談ずるむね、即心是仏、是心作仏（さぶつ）というて、多却（たごふ）の修行をふることなく、一座に五仏の正覚（しやうがく）をとなふ、仏法の極妙（ごくめう）といふべし。しかあるに、いまいふところの修行、なにのすぐれたることあれば、かれらをさきおきて、ひとへにこれをすゝむるや

しめしてはいはく、しるべし、仏家（ぶつけ）には教（けう）の殊劣（しゆれつ）を対論することなく法の浅深（せんじん）をえらばず、たゞし修行の真偽（しんぎ）をしるべし。草花山水（さうけさんすい）にひかれて仏道に流入（るにふ）することありき、土石沙礫（どしやくしやりやく）をにぎりて仏印（ぶつちん）を稟持（ひんじ）することあり。いはんや広大の文字（もんじ）万象（ばんぞう）にあまりてなほゆたかなり、転大法輪（てんだいほふりん）又一塵（ちん）におさまれり。しかあればすなはち、即心即仏のことば、なおこれ水中の月なり、即坐成仏（そくざじやうぶつ）のむね、さらに又かゞみのうちのかげなり。ことばのたくみにかゝはるべからず。いま直証菩提（ちきしようぼだい）の修行をすゝむるに、仏祖単伝の妙道をしめして、真実の道人（だうにん）とならしめんとなり。

又、仏法を伝授することは、かならず証契（しやうかい）の人をその宗師（しゅうし）とすべし。文字（もんじ）をかぞふる学者をもてその導師とするにたらず。一盲の衆盲（しゅまう）をひかんがごとし。いまこの仏祖正伝の門下には、みな得道証契の哲匠（てつしやう）をうやまひて、仏法を住持せしむ。かるがゆえに、冥陽（みようやう）神道（しんたう）もきたり帰依し、証果の羅漢（らかん）もきたり問法（もんぽふ）するに、おのおの心地（しんち）を開明（かいみやう）する手をさづけずといふことなし。余門にいまだきかざるところなり。たゞ、仏弟子（ぶつでし）は仏法をならふべし。

又しるべし、われらはもとより無上菩提（むじやうぼだい）かけたるにあらず、とこしなへに受用（じゅよう）すといへども、承当（じやうたう）することゝえざるゆゑに、みだりに知見をおこす事をならひととして、これを物（もの）とおふによりて、大道（だいだう）いたづらに蹉過（さこ）す。この知見によりて、空花（くうげ）まちまちなり。あるいは十二輪轉（りんでん）、二十五有（う）の境界（きやうがい）とおもひ、三乘五乘、

有仏無仏（うぶつむぶつ）の見、つくる事なし。この知見をならうて、仏法修行の正道（しやうどう）とおもふべからず。しかあるを、いまはまさしく仏印（ぶつちん）によりて万事を放下（ほうげ）し、一向に坐禅するとき、迷悟情量のほとりをこえて、凡聖（ぼんしやう）のみちにかゝはらず、すみやかに格外（かくぐあい）に逍遙（せうえう）し、大菩提（ぼだい）を受用（じゅよう）するなり。彼の文字（もんじ）の筌罟（せんてい）にかゝはるものの、かたをならぶるにおよばむや。

第五問答

とうていはく、三学のなかに定学（ぢやうがく）あり、六度のなかに禅度あり。ともにこれ一切の菩薩の、初心よりまなぶところ、利鈍をわかず修行す。いまの坐禅も、そのひとつなるべし、なによりてか、このなかに如来の正法あつめたりといふや。

しめしてはいはくいまこの如来一大事の正法眼蔵、無上の大法（だいほふ）を、禅宗となづくるゆえに、この問（もん）きたれり。

しるべし、この禅宗の号は、神丹（しんだん）以後におこれり、竺乾（ぢくけん）にはきかず。はじめ達磨大師、嵩山（そうざん）の少林寺にして九年面壁（くねんめんぺき）のあひだ、道俗いまだ仏正法をしらず、坐禅を宗（しゅう）とする婆羅門（ばらもん）となづけき。のち代々（だいだい）の諸祖、みなつねに坐禅をもはらす。これを見るおろかな俗家は、実をしらず、ひたゝけて坐禅宗といひき。いまのよには、坐のことばを簡して、たゞ禅宗といふなり。そのこゝろ、諸祖の広語にあきらかなり。六度および三学の禅定にならべていふべきにあらず。

この仏法の相伝の嫡意（ちやくい）なること、一代にかくれなし。如来、むかし靈山会上（りやうぜんえじやう）にして、正法眼蔵涅槃（ねはん）妙心、無上の大法（だいほふ）をもて、ひとり迦葉尊者（かせふそんじや）にのみ付法せし儀式は、現在して上界にある天衆、まのあたりみしもの存ぜり、うたがふべきにたらず。おほよそ仏法は、か的那天衆、とこしなへに護持するものなり、その功いまだふりず。

まさにしるべし、これは仏法の全道なり、ならべていふべき物なし。

第六問答

とうていはく、仏家なにゝよりてか、四儀のなかに、たゞし坐にのみおほせて禪定をすゝめて証入をいふや。

しめしていはく、むかしよりの諸仏、あひつぎて修行し、証入せるみち、きはめしりがたし。ゆゑをたづねば、たゞ仏家のもちゐるところをゆゑとしるべし。このほかにたづねべからず。たゞし、祖師ほめていはく、「坐禪はすなはち安樂の法門なり」。はかりしりぬ、四儀のなかに安樂なるゆゑか。いはむや、一仏二仏の修行のみちにあらず、諸仏諸祖にみなこのみちあり。

第七問答

とうていはく、この坐禪の行（ぎやう）は、いまだ仏法を証会（しょうゑ）せざらんものは、坐禪辨道してその証をとるべし。すでに仏正法をあきらめえん人は、坐禪なにのまつところかあらむ。

しめしていはく、癡人（ちにん）のまへにゆめをとかず、山子（さんす）の手には舟楫（しうたう）をあたへがたしといへども、さらに訓（くん）をたるべし。

それ、修証はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道（げどう）の見なり。仏法には、修証これ一等なり。いまでも証上の修（しゆ）なるゆゑに、初心の辨道すなはち本証の全体なり。かるがゆゑに、修行の用心をさづくるにも、修（しゆ）のほかに証をまつおもひなかれとをしふ、直指（じきし）の本性なるがゆゑなるべし。すでに修（しゆ）の証（しょう）なれば、証にきはなく、証の修なれば、修にはじめなし。ここをもて、釈迦如来・迦葉（かせふ）尊者、ともに証上の修に受用せられ、達磨大師・大鑑（だいかん）高祖、おなじく証上の修に引転（いんでん）せらる。仏法住持のあと、みなかくのごとし。

すでに証（しょう）をはなれぬ修（しゆ）あり、われらさいはいに一分（いちぶん）の妙修（めうしゆ）を単伝せる、初心の辨道すなはち一分の本証を無為（むゐ）の地（ぢ）にうるなり。しるべし、修（しゆ）をはなれぬ証を染汚（ぜんわ）せざらしめんがために、仏祖しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ。妙修（めうしゆ）を放下すれば本証手の中（うち）にみたり、本証を出身すれば、妙修（めうしゆ）通見におこなはる。

又、まのあたり大宋国にしてみしかば、諸方の禅院みな坐禅堂をかまへて、五百六百および一二千僧（ぞう）を安（あん）じて、日夜（にちや）坐禅をすゝめき。その席主とせる伝仏心印の宗師（しゅうし）に、仏法の大意（だいい）をとぶらひしかば、修証の両段にあらぬむねをきこえき。このゆゑに、門下の参学のみにあらず、求法（ぐほう）の高流（かうりう）、仏法のなかに真実をねがはむ人、初心後心（ごしん）をえらばず、凡人聖人（ぼんにんしやうにん）を論ぜず、仏祖のをしへにより、宗匠の道（みち）をおうて、坐禅辦道すべしとすゝむ。きかずや祖師のいはく、「修証はすなはちなきにあらず、染汚（ぜんわ）することはいへじ」。又いはく、「道（だう）をみるもの、道（だう）を修す」と。しるべし、得道のなかに修行すべしといふことを。

第八問答

とうていはく、わが朝（てう）の先代に、教（けう）をひろめし諸師、ともにこれ入唐伝法（にったうでんぽふ）せしとき、なんぞこのむねをさしおきて、たゞ教（けう）をのみつたへし。

しめしていはく、むかしの人師（にんし）、この法をつたへざりしことは、時節のいまだいたらざりしゆゑなり。

第九問答

とうていはく、かの上代の師、この法を会得（ゑとく）せりや。

しめしていはく、会（ゑ）せば通じてむ。

第十問答

とうていはく、あるがいはく、「生死（しやうじ）をなげくことなかれ、生死を出離（しゆつり）するにいとすみやかなるみちあり。いはゆる心性（しんしやう）の常住（じやうじゆう）なることわりをしるなり。そのむねたらく、この身体（しんだい）は、すでに生（しやう）あればかならず

滅にうつされゆくことありとも、この心性はあへて滅する事なし。よく生滅（しょうめつ）にうつされぬ心性わが身にあることをしりぬれば、これを本来の性（しやう）とするがゆゑに、身はこれかりのすがたなり、死此生彼（しししやうひ）さだまりなし。心（しん）はこれ常住なり、去来現在（こらいげんざい）かはるべからず。かくのごとくするを、生死（しやうじ）をはなれたりとはいふなり。このむねをしるものは、從來の生死ながくたえて、この身をはるとき性海（しやうかい）にいる。性海に朝宗（てうそう）するとき、諸仏如来のごとく妙徳まさにそなはる。いまはたとひしるといへども、前世（ぜんせ）の妄業（まうごふ）になされたる身体（しんたい）なるがゆゑに、諸聖（しよしやう）とひとしからず。いまだこのむねをしらざるものは、ひさしく生死にめぐるべし。しかあればすなわち、たゞいそぎて心性の常住なるむねを了知すべし。いたづらに閑坐して一生をすぐさん、なにのまつところかあらむ」。

かくのごとくいふむね、これはまことに諸仏諸祖の道（どう）にかなへや、いかむ。

しめしていはく、いまいふところの見（けん）、まったく仏法にあらず。

先尼外道（せんにげだう）が見（けん）なり。

いはく、かの外道の見は、わが身、うちにひとつの靈知あり、かの知（ち）、すなはち縁にあふところに、よく好悪（かうあく）をわきまへ、是非をわきまふ。痛痒（つうやう）をしり、苦樂をしる、みなかの靈知のちからなり。しかあるに、かの靈性（れいしやう）は、この身の滅するとき、もぬけてかしこにむまるゝゆゑに、こゝに滅すとみゆれども、かしこの生（しやう）あれば、ながく滅せずして常住なりといふなり。かの外道が見（けん）、かくのごとし。

しかあるを、この見をならうて仏法とせむ、瓦礫（ぐわりやく）をにぎって金宝（こんぼう）とおもはんよりもなほおろかなり。癡迷（ちめい）のはづべき、たとふるものなし。大唐国の慧忠（ゑちゆう）国師、ふかくいましめたり。いま、心常相滅（そうめつ）の邪見を計して、諸仏の妙法にひとしめ、生死（しやうじ）の本因（ほんいん）をおこして、生死をはなれたりとおもはむ、おろかなるにあらずや。もともあはれむべし。たゞこれ外道の邪見なりとされ、みゝにふるべからず。

ことやむことをえず、いまなほあはれみをたれて、なんぢが邪見をすくはば、しるべし、仏法にはもとより身心一如（しんじんいちによ）にして、性相不二（しやうそうふに）なりと談ずる、西天東地（さいてんとうち）

おなじくしれるところ、あへてたがふべからず。いはむや常住を談ずる門には万法（まんぼう）みな常住なり、身と心とをわくことなし。寂滅を談ずる門には諸法みな寂滅なり。性（しやう）と相（さう）とをわくことなし。しかあるを、なんぞ身滅心常（しんめつしんじやう）といはむ、正理（しやうり）にそむかざらむや。しかのみならず。生死（しやうじ）はすなはち涅槃（ねはん）なりと覺了すべし。いまだ生死のほかに涅槃を談ずることなし。いはむや、心（こころ）は身（み）をはなれて常住なりと領解（りやうげ）するをもて、生死をはなれたる仏智に妄計（まうげ）すといふとも、この領解（りやうげ）智覺の心は、すなはちなほ生滅して、またく常住ならず。これ、はかなきにあらずや。

嘗觀（しやうくわん）すべし、身心一如（しんじんいちによ）のむねは、仏法のつねの談ずるところなり。しかあるに、なんぞ、この身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて、生滅せざらむ。もし、一如なるときあり、一如ならぬときあらば、仏説おのづから虚妄（こまう）になりぬべし。又、生死はのぞくべき法ぞとおもへるは、仏法をいとふつみとなる。つゝしまざらむや。

しるべし、仏法に心性大總相の法門といふは、一大法界（ほふかい）をこめて、性相をわかず、生滅をいふことなし。菩提涅槃におよぶまで、心性にあらざるなし。一切諸法、万象森羅（まんぞうしんら）ともにたゞこれ一心にして、こめずかねざることなし。このもろもろの法門、みな平等一心なり。あへて異違（いゐ）なしと談ずる、これすなはち仏家（ぶつけ）の心性をしれる様子なり。

しかあるを、この一法に身と心とを分別（ぶんべつ）し、生死と涅槃とをわくことあらむや。すでに仏子なり、外道の見（けん）をかたる狂人のしたのひゞきを、みゝにふるゝことなかれ。

第十一問答

とうていはく、この坐禅をもはらせむ人、かならず戒律を嚴淨（ごんじやう）すべしや。

しめしていはく、持戒梵行（ぼんぎやう）は、すなはち禅門の規矩なり、仏祖の家風なり。いまだ戒をうけず、又戒をやぶれるもの、その分（ぶん）なきにあらず。

第十二問答

とうていはく、この坐禅をつとめん人、さらに真言止観（しんごんしくわん）の行（ぎやう）をかね修（しゆ）せん、さまたげあるべからずや。

しめしていはく、在唐（さいたう）のとき、宗師（しゆうし）に真訣（しんけつ）をきゝしちなみに、西天東地の古今に、仏印を正伝せし諸祖、いづれもいまだしかのごときの行（ぎやう）をかね修すときかずといひき。まことに、一事をこととせざれば一智に達することなし。

第十三問答

とうていはく、この行は、在俗の男女（なんによ）もつとむべしや、ひとり出家人（しゆつけにん）のみ修するのか。

しめしていはく、祖師のいはく、仏法を会（あ）すること、男女貴賤（なんによきせん）をえらぶべからずときこゆ。

第十四問答

とうていはく、出家人（しゆつけにん）は、諸縁すみやかにはなれて、坐禅辨道にさはりなし。在俗の繁務は、いかにしてか一向に修行して、無為の仏道にかなはむ。

しめしていはく、おおよそ、仏祖あはれみのあまり、広大の慈門をひらきおけり。これ一切衆生を証入せしめんがためなり、人天（にんでん）たれかいらざらむものや。こゝをもて、むかしいまをたづぬるに、その証これおほし。しばらく、代宗・順宗の帝位にして、万機（ばんき）いとしげかりし、坐禅辨道して仏祖の大道を会通（ゑつう）す。李相国（りしやうこく）・防相国（ぼうしやうこく）、ともに輔佐（ふさ）の臣位にはむべりて、一天の股肱たりし、坐禅辨道して仏祖の大道に証入す。たゞこれこゝろざしのありなしによるべし、身の在家出家にかゝはらじ。又ふかくことの殊劣をわきまふる人、おのづから信ずることあり。いはむや世務は仏法をさふとおもへるものは、たゞ世中に仏法なしとのみしりて、仏中に世法なき事をいまだしらざるなり。

ちかごろ大宋に、馮相公（ひんしやうこう）といふありき。祖道に長ぜりし大官なり。のちに詩をつくりてみづからいふに、いはく

公事之余喜坐禪、 公事（くうじ）の余（ひま）に坐禪を喜（この）む
少曾將脇到床眠。 曾（かつ）て脇を將（も）て床（ゆか）に到（いた）

して眠（ねぶ）ること少（な）し

雖然現出宰宦相、 然（しか）く宰宦相（さいくわんしやう）と現出せ
りと雖（いへど）も、

長老之名四海伝。

長老の名、四海に伝はる

これは、宦務にひまなかりし身なれども、仏道にこゝろざしふかければ、得道せるなり。他をもてわれをかへりみ、むかしをもていまをかゞみるべし。

大宋国には、いまのよの国王大臣、士俗男女、ともに心を祖道にとゞめずといふことなし。武門文家（ぶんけ）、いづれも参禪学道をこゝろざせり。こゝろざすもの、かならず心地（しんち）を開明（かいみやう）することおほし。これ世務の仏法をさまたげざる、おのづからしられたり。

国家（こくけ）に真実の仏法弘通（ぐづう）すれば、諸仏諸天ひまなく衛護（ゑいご）するがゆゑに、王化太平（わうくわたいへい）なり。聖化太平（せいくわたいへい）なれば、仏法そのちからをうるものなり。

又、釈尊の在世には、逆人（ぎやくにん）邪見みちをえき。祖師の会下（ゑか）には、獺者樵翁（れふしやせうそう）さとりをひらく。いはむやそのほかの人をや。たゞ正師の教道をたづぬべし。

第十五問答

とうていはく、この行は、いま末代悪世にも、修行せば証をうべしや。

しめしていはく教家に名相（みやうそう）をこととせるに、なほ大乘実教には、正像末法をわくことなし。修すればみな得道すといふ。いはむやこの単伝の正法には、入法出身（にっぽふしゅっしん）、おなじく自家（じけ）の財珍を受用（じゆよう）するなり。証の得否（とくふ）は、修せむもの、おのづからしむこと、用水（ようすい）の人の冷煖（れいだん）

をみづからわきまふるがごとし。

第十六問答

とうていはく、あるがいはいはく、「仏法には、即心是仏のむねを了達（れうだつ）しぬるがときは、くちに經典（きやうでん）を誦（じゆ）せず、身に仏道を行ぜざれども、あへて仏法にかけたるところなし。たゞ仏法はもとより自己にありとする、これを得道の全円とす。このほかさらに他人にむかひてもとむべきにあらず。いはむや坐禪辨道をわづらはしくせむや」。

しめしてはいはく、このことば、もともとはかなし。もしなんちがいふごとくならば、こゝろあらむもの、たれかこのむねをしへむに、しることなからむ

しるべし、仏法はまさに自他の見（けん）をやめて学するなり。もし、自己即仏とするをもて得道とせば、釈尊むかし化道（けだう）にわづらはじ。しばらく古徳の妙即をもてこれを証すべし。

むかし、即公監院といふ僧、法眼禪師の会中（ゑちゆう）にありしに、法眼禪師、とうていはく、「則監寺（そくかんす）、なんちわが会（ゑ）にありていくばくのときぞ」。

則公がいはいはく、「われ師の会にはむべりて、すでに三年をへたり」。

禪師のはいはく、「なんちはこれ後生（こうせい）なり、なんぞつねにわれに仏法をとばざる」。

則公がいはいはく、「それがし和尚をあざむくべからず。かつて青峰の禪師のところでありしとき、仏法におきて安樂のところを了達せり」。

禪師のはいはく、「なんちいかなることばによりてか、いることをえし」。

則公がいはいはく、「それがしかつて青峰にとひき、「いかなるかこれ学人（がくにん）の自己なる」。青峰のはいはく、「丙丁童子来求火（ひやうちやうどうじきたつてひをもとむ）」」。

法眼のはいはく、「よきことばなり。たゞし、おそらくなんち会せざらむことを」。

則公がいはいはく、「丙丁（ひやうちやう）は火に属す。火をもてさらに火をもとむ、自己をもて自己をもとむるにいたりと会せり」。

禪師のはいはく、「まことにしりぬ、なんじ会せざりけり。仏法もしかくのごとくならば、けふまでにつたはれじ」。

こゝに則公、慄悶（そうもん）して、すなわちたちぬ。中路（ちゅうろ）にいたりておもいき、禪師はこれ天下の善知識、又五百人の大導師なり。わが非をいさむる、さだめて長処あらむ。禪師のみもとにかへりて懺悔礼謝（さんげれいしゃ）してとうていはく、「いかなるかこれ学人の自己なる」。

禪師のいはく、「丙丁童子来求火（ひやうちやうどうじらいきうくわ）」と

則公、このことばのしたに、おほきに仏法をさとりき。

あきらかにしりぬ、自己即仏の領解（りやうげ）をもて仏法をしれりといふにはあらずといふことを。もし自己即仏の領解を仏法とせば、禪師さきのことばをもてみちびかじ、又しかのごとくいましむべからず。たゞまさに、はじめ善知識をみむより、修行の儀則を咨問（しもん）して、一知半解（はんげ）を心にとゞむることなかれ。仏法の妙術、それむなしからじ

第十七問答

とうていはく、乾唐（けんたう）の古今（ここん）をきくに、あるいはたけのこゑをきゝて道（だう）をさとり、あるいははなのいろをみてこゝろをあきらむるも物あり、いはむや、

釈迦大師は、明星（みやうじやう）をみしとき道（だう）を証（しよう）し、阿難尊者は、刹竿（せつかん）のたふれしところに法をあきらめしのみならず、六代よりのち、五家（け）のあひだに、一言（いちごん）半句のしたに心地（しんち）をあきらむるものおほし。かれらかならずしも、かつて坐禅辨道せるもののみならずや。

しめしていはく、古今に見色明心（けんしきみようしん）し、聞声悟道（もんしやうごどう）せし当人（たうにん）、ともに辨道に擬議量（ぎぎりやう）なく、直下（ちよくか）に第二人なきことをしるべし。

第十八問答

とうていはく、西天および神丹国（しんだんこく）は、人もとより質直（しちぢき）なり。中華のしからしむるによりて、仏法を教化するに、いとはやく会人（ゑにん）す。我朝（わがてう）は、むかしより人に仁智（じ

んち)すくなくして、正種(しやうしゆ)つもりがたし。蕃夷のしからしむる、うらみざらむや。又このくにの出家人は、大国の在家人(ざいけにん)にもおとれり。举世(こせ)おろかにして、心量狭少(けふせう)なり。ふかく有為(うゐ)の功(こう)を執(しふ)して、事相(じさう)の善(ぜん)をこのむ。かくのごとくのやから、たとひ坐禅すといふとも、たちまちに仏法を証得せむや。

しめしていはく、いふがごとし。わがくにの人、いまだ仁智あまねからず、人また迂曲(うごく)なり。たとひ正直(しやうちき)の法をしめすとも、甘露かへりて毒となりぬべし。名利にはおもむきやすく。惑執(ごくしやく)とらけがたし。しかはあれども、仏法に証入(しようにふ)すること、かならずしも人天(にんでん)の世智(せち)をもて出世の舟航とするにはあらず。仏在世にも、てまりによりて四果を証し、袈裟(けさ)をかけて大道(だいだう)をあきらめし、ともに愚暗のやから、癡狂(ちきやう)の畜類(ちくるい)なり。たゞし、正信(しやうしん)のたすくるところ、まどひをはなるゝみちあり。癡老(ちらう)の比丘(びく)黙坐せしをみて、設齋(せつさい)の信女(しんによ)さとりをひらきし、これ智によらず、ことばをまたず、かたりをまたず、たゞしこれ正信にたすけられたり。

また、釈教の三千界(がい)にひろまること、わづかに二千余年の前後なり。刹土(せつど)のしなじなる、かならずしも仁智のくににあらず。人またかならずしも利智聡明(りちそうみよう)のみあらむや。しかあれども、如来の正法、もとより不思議の大功德力をそなへて、ときいたればその刹土にひろまる。人まさに正信修行すれば、利鈍をわかず、ひとしく得道するなり。わが朝は仁智のくににあらず、人に知解(ちげ)おろかなりとして、仏法を会(ゑ)すべからずとおもふことなかれ。いはむや。人みな般若(はんにや)の正種(しやうしゆ)ゆたかなり、たゞ承当(じょうとう)じょうとう)することまれに、受用することいまだしきならし。

さきの問答往来し、賓主相交(ひんじゅさうかう)することみだりがはし。いくばくか、はななきそらにはなをなさしむる。しかありとも、このくに、坐禅辨道(ざぜんべんどう)におきて、いまだその宗旨つたはれず、しらむところささむもの、かなしむべし。このゆゑに、いさゝか異域(いゐき)の見聞をあつめ、明師(めいし)の真訣(しんけつ)をしるしとゞめて、参学(さんがく)のねがはむにきこえむとす。このほか、叢林の規範および寺院の格式、いまし

めすにいとまあらず、又草々にすべからず。

おほよそ我朝（わがてう）は、龍海（りようかい）の以東（いとう）にところして、雲煙（うんえん）はるかなれども、欽明（きんめい）・用明（ようめい）の前後より秋方（しゅうほう）の仏法東漸（とうぜん）する、これすなはち人のさいはいなり。しかあるを名相（みやうさう）事縁（じえん）しげくみだれて、修行（しゆぎやう）のところにわづらふ。いまは破衣（はいつ）掇（も）盂（よ）（はいとつう）を生涯（しや）として、青巖（せいがん）白石（はくせき）のほとりに茅（ぼう）をむすむで端坐（たんざ）修練（しゆれん）するに、仏向上（ぶつかうじやう）の事（じ）たちまちにあらはれて、一生（いしやう）参学（さんがく）の大事（だいじ）すみやかに究竟（くきやう）するものなり。これすなはち龍牙（りやうが）（げ）の誠勅（せいしやく）（かいちよく）なり、鷄足（けいそく）の遺風（いふう）なり。その坐禅（ざぜん）の儀則（ぎそく）は、すぎぬる嘉祿（かりく）のころ撰集（せんじゆ）せし「普勸坐禅儀（ふくざぜんぎ）」に依行（えぎやう）すべし。

曾礼（そうらい）（それ）、仏法（ぶつぽう）を国中（こくちゆう）に弘通（くわうつう）すること、王勅（おうしやく）をまつべしといへども、ふたゝび靈山（りやうぜん）の遺囑（いゐぞく）をおもへば、いま百万億刹（ひやくまんおくせつ）に現出（げんしゅつ）せる王公相将（しやうしやう）、みなともにかたじけなく仏勅（ぶつしやく）をうけて、夙生（しゆくしやう）に仏法（ぶつぽう）を護持（ごぢ）する素懷（そくわい）をわすれず、生来（しやうらい）せるものなり。その化（け）をしくさかひ、いづれのところか仏国土（ぶつこくど）にあらざらむ。このゆゑに、仏祖（ぶつそ）の道を（だう）を流通（りつう）せむ、かならずしもところをえらび縁（えん）をまつべきにあらず、たゞ、けふをはじめとおもはむや。

しかあればすなはち、これをあつめて、仏法（ぶつぽう）をねがはむ哲匠（てつしやう）、あはせて道（だう）をとぶらひ雲遊（うんゆう）萍寄（へいき）（ひやうき）せむ参学（さんがく）の真流（しんりう）にのこす。ときに、

寛喜辛卯中秋日

入宋伝法沙門道元記

（岩波文庫「正法眼蔵」より）

（お断り・・・原文には問答の附番の記載はありません）